

ルツ記

この書は人間の日常生活の喜びや苦しみに
神がどのようにかかわってくださるのかを見事に描いています
この書の主な登場人物は未亡人のナオミモアブ人のルツ
そしてイスラエルの農夫ボアズ の3人です
彼らの物語は巧みに構成された4つの章に記されています

では詳しく見ていきましょう 1章はさばきつかさが治めていた
ころという言葉で始まり これは士師記の暗く困難な時代
を指しています そして飢饉に苦しむベツレヘム
のイスラエル人一家が登場します 彼らは食糧を求めて
イスラエルのかつての敵であるモアブに移住しました
その地で一家の主人は死に2人の息子はそれぞれモアブの女性
ルツとオルパと結婚します それから2人の息子も死んでしまい
あとにはナオミと2人の嫁だけが残されました

モアブに留まる理由がなくなった ナオミは
2人の嫁に自分は故郷に帰ると告げます
夫を亡くした外国人がイスラエルで暮らしていくのは
大変だと知っていたナオミは2人にモアブに残るよう説得しました
オルパはそれに同意しましたが ルツは頷かず
ナオミに対して驚くべき誠実さを現わし
あなたが行かれるところに私も 行きますあなたの民は私の民
あなたの神は私の神と言ったのです
そこで2人は一緒にイスラエルへ 帰りました

1章はナオミが自分の悲運を嘆いて 名前を
ヘブル語で苦しみを意味するマラ に変えた
という記述で終わります

2章はナオミとルツが
どこで食糧を手に入れるか話し合う場面から始まります
それはたまたま大麦の収穫の季節 でした
食糧を探しに行ったルツは たまたまボアズという人の畑で
落穂拾いをする事になり ボアズはたまたまナオミの親戚
でした

ボアズは高潔な人でルツの存在に気が付き その身の上について話を聞くと彼女に対して非常に気前よく 特別な配慮をして移民であるルツが 自分の畑でたくさんの落ち穂を拾えるようにしました ボアズはこうすることで在留異邦人や貧しい者に惜しみなく施せという トーラーの戒めにしただけなのです ボアズはまたナオミに対するルツの誠実さに感銘を受け 神が彼女の決断に報いてくださるようにと祈りました 家に帰ったルツからボアズに出会ったことを聞いた ナオミは心を躍らせました ボアズはナオミの家族の買い戻しの権利を持っていたのです この買い戻しというのはイスラエルの文化的な制度で もし一家の主人が妻や子ども土地を残して死んだ場合 買い戻しの権利のある者がその 未亡人と結婚し 土地を受け継ぎその家族を守る 責任があるというものです だからナオミはここで自分の家族に 再び未来が見えてきたかもしれない と希望をもったのです

3章はナオミとルツが ボアズにもこの状況に気づいてほしいと 作戦を立てるところから始まり まず ルツは未亡人の喪服を着ることを やめ 再婚の準備ができていることを示しました 夜になるとルツは農園にいるボアズに会いに行きました 彼女がボアズのもとに忍び寄り と彼は目を覚まして驚きました ルツははっきりと自分の意図を明かして もしナオミの家を買い戻すつもりがあるなら 自分と結婚してほしいと言います ボアズは改めてナオミとその一族 に対するルツの誠実さに驚き 彼女のことを高潔な女性と呼びました これは箴言 31章に描かれている 女性を表したのと同じ言葉です ボアズは町の長老たちの前で法にのっとって ルツもナオミの家も買い戻すから 明日まで待つようと言います ルツがナオミのもとに戻り 2人でこれらの出来事に驚嘆している 場面でこの章は終わります

4章はハッピーエンドに向けて動き

出します ボアズよりもナオミにもっと近い
関係の親戚がいたので 買い戻しの権利はまずその人に
ありました ところが彼は
そのためにはモアブ人ルツと 結婚しなければならないことに
気が付くと 買い戻しをする気を失ってしまい
ました 一方でボアズはルツの誠実な人
柄を知っていたので ナオミの家を買い戻しルツと結婚
したのです こうして
ストーリーのいちばん初めでル ツがナオミに誠実だったように
ボアズもナオミの一家に誠実でした 1章で起きた悲劇がすべて逆転して
ストーリーは終わるのです 夫に死なれ息子たちに死なれた
ナオミの悲しみも ルツが再婚し子どもを産むこと
によって埋め合わされました

物語の初めと終わりにシンメトリー
に配置された出来事は見事です まず一家の悲劇のあとに
ルツの素晴らしい**誠実なふるまい** がありました
そしてそれに応えるかのように ボアズの**誠実な振る舞い**が
ナオミの一族を回復に導いたの です
同じように**呼応する出来事**は物語 の中盤にもあります
どちらの章もナオミとルツが **将来について相談**する場面から
始まりますが それに続いてルツとボアズが神の
摂理によって出会い 最後は
ナオミとルツが事の成り行きに 喜ぶ場面で終わるのです
ルツ記の構成は非常に巧みであり この書の興味深い特徴と結びついて
います それは物語の中にほとんど神について
の記述がないことです 確かに登場人物たちの会話の中
には何度か出てきますが 著者は神がああしたとかこうした
という直接的な表現は一切しません これこそが卓越した点なのです
なぜならこの物語のすべての場面 でそれぞれの状況
一人一人の選択をつなぎ合わせる ように神が働いているからです
ナオミは自分にふりかかった災 いを見て
神は自分を罰しているのだと思い ました
しかしルツ記は最初から最後まで 彼女と彼女の家族を回復させる
神の計画だったのです 神はそれをルツの決断力と誠実
さを通して成し遂げ ナオミの人生を癒したのです

しかしこれは気前が良く誠実な人 柄を持つ
平凡な農夫であるボアズを抜き には起こりえないことでした
神は彼の高潔な人格と ナオミの家が絶えないようにする
ルツの決断力を結び合わせました このようにルツ記は神の計画と
意思 そして人間の決断と意思が互いに
働き合うことを示しています 神は誠実に従おうとする人々の
行動を 世界を贖うご自身の計画に組み
入れるのです それがルツ記のエンディングにも
描かれています ルツ記はボアズとルツの息子である
オベデが メシアの血筋につながる
ダビデ王の祖父になったことを 示す系図で終わっています
このようにこの物語が描く平凡 な日常の出来事が
世界を贖う神の壮大な計画に組み 込まれているのです
ルツ記は私たちの人生に起こる ありふれた出来事も
神の計画に組み込まれるかもしれない ことを示唆しています
これがルツ記です

500 字要約

「ルツ記」は、人間の日常生活の中で神がかかわる様子を描いた書物で、主要な登場人物は未亡人のナオミ、モアブ人のルツ、そしてイスラエルの農夫ボアズの 3 人です。物語は 4 つの章に分かれており、以下に要約します。

第 1 章では、士師記の時代で飢饉に苦しむイスラエル人一家が登場し、ナオミの夫と息子たちは亡くなり、ナオミと 2 人の嫁だけが残ります。ナオミは嫁たちにモアブに残るように説得しますが、ルツはナオミに付き添うことを選び、イスラエルに帰ります。

第 2 章では、ナオミとルツが食糧を手に入れるために話し合い、ルツがボアズの畑で落穂拾いをする場面が描かれます。ボアズはルツに親切に接し、ナオミの家族に対するルツの誠実さに感銘を受けます。

第 3 章では、ナオミとルツがボアズに気に入られるように計画を立て、ルツがボアズに再婚を申し出ます。ボアズはナオミの家族の買い戻しの権利を持っており、ルツと結婚することを決意します。

第 4 章では、ボアズがナオミの家族を買い戻し、ルツと結婚することで物語はハッピーエンドに向かいます。ナオミの悲しみが埋め合わせられ、物語の初めと終わりにシンメトリーが見られます。

「ルツ記」は神についての直接的な記述は少ないが、神が登場人物たちの選択と行動を通じて働いていることを示唆しており、神の摂理が物語全体に影響を与えていることが強調されています。